日本人の「幽霊」のイメージとインド人の「幽霊」のイメージ
――その類似点と相違点

プラット アブラハム　ジョージ

インドの諸公用語でブート（Bhoot）またはプレータ（Preta）と呼ばれる「幽霊」の話を聞くと、インド･ケーララ州（Kerala）出身の私の頭にまず浮かんでくるイメージは、真っ白なサリ（Sari、インド人女性の民族衣装）を着て、つやつやした黒髪が膝裏まで垂れ下がっていて、煙のような、靄のようなものの中から突然出現する妖艶な別嬪（べっぴん）エクシ（Yakshi）の姿である。そして、思いもかけないときに、その別嬪の女性の口からは牙が出て、見ただけでも気が遠くなるような恐ろしい姿に化けて、そそのかして連れてきた人間（ほとんどの場合は男であるが、ときには女性も犠牲になる）を噛み千切ってその肉を食い、血を飲んでしまう。残るのは骨と爪と髪の毛だけである。ケーララ地方に住む子どもなら誰もが、幼いときに、両親や祖父母から伝統的に伝わるこのような幽霊譚を耳にしながら成長していくのである。

図１　エクシ（ケーララ出身のインド人の頭にある幽霊のイメージ）
出典：ml.wikipedia.org/yakshi

インドは巨大な国土を所有する一方、多様性に満ちており、各言語・文化圏に伝わる幽霊の話も多種多様で、ある地方に古くから伝承されてきた幽霊が他の地方の住民には全く知られていないという場合が多い。しかし、古来から、ヴェタール（Vetaal）という幽霊の話だけはインド全土に知れ渡っている。なぜかというと、インド最古の伝承文学の一つである「ヴィクラマーディッティヤとヴェタール」（*Vikramaditya and Vetaal*）が、おそらく口承文学における最初の「幽霊」物語であるからであろう。ヴェタールは中央インドのウッジャイン（Ujjain）の火葬場に住んでいたと信じられている。彼は、そこの王であったヴィクラマーディッティヤに服従していた。ところが、ヴェタールの謎めいた難問に対し 23 回も正しく答えた王が 24 回目の質問には答えることができなかったため、ヴェタールは王から離れ

図2　木に逆さまにぶら下がるヴェタール
出典：warriorsofmyth.wikia.com

て行ってしまう。実は、自分の謎めいた質問に正しく答えられる限りは、いつまでも服従し続けるという約束だったそうである。ヴェタールはいつも火葬場にある木の枝に逆さにぶら下がっていたといわれる。日本でも非業の死を遂げた亡者の幽霊は「逆幽霊」、すなわち「さかさまの幽霊」として出現するといわれている（小松和彦）。しかし、このヴェタールは決して前述のエクシのような恐ろしいものではないので、子どもでもその話を面白く聴くだけで、怖がることはめったにない。

このように「幽霊」の話になじみ、さまざまな幽霊の存在を認めているインド人ではあるが、あなたは「幽霊」の存在を信じるか、と質問すると、教養の有無を問わず、「何を言う！そんなものいるもんか」と言い返す人の方が多い。しかし、その同じ相手に対し、「ああ！そこに「幽霊」がいる！」と突然叫ぶと、「へっ」と驚き、ぞっとした顔をする。つまり、神・幽霊・悪魔・妖怪など超自然的な物の存在を、表では信じないふりをしている無神論者や不信心者でさえも、心の奥底には一種の恐怖感を抱え込んでいるということである。それは、私たち人間の特性でもある。

幽霊の定義

日本と同じようにインドにも昔から、他界・異界・霊界・幽冥界などの概念がある。人が死ぬとその霊魂はすぐには他界へ行かず、あの世とこの世の境目をしばらく漂い、親戚による葬送儀礼を含むさまざまな儀礼・祈祷によって、あの世へと旅立っていく。しかし、この世への深い執着を持つ人の霊魂、もしくは非業の死を遂げた人の霊魂は、幽霊としてこの世にさまよい続ける、とインド人は信じている。つまり、インド人の感覚内にあるイメージも日本古来の「幽霊」のイメージとほとんど同じで、死んだ「もの」の霊魂の異常な状態を映し、その魂または霊がこの世にさまよい続ける状態をブート（Bhoot）と呼ぶ。語源的に見るとBhootという言葉はサンスクリット語のBhuta（Bhutam）から発生した言葉だと分かる。Bhutaには「過去」「過去の存在」といった意味が含まれているので、ブート（Bhoot）は「過去に生きていたものの現れ」ということになる。残念ながら日本と比べて、インドでは、民俗学の研究こそ盛んに行われているものの、「幽霊」に関する科学的、系統的研究は皆無に近い。だから、「ブート」（幽霊）の定義を研究資料や参考文献などから掘り起こそうとしても、なかなか見つからない。一般人の持っているブート（幽霊）のイメージは、口承文学、ホラー小説、映画などから得られたものの方が

多いので、インド人の「幽霊」の定義は一様ではない気がする。

世界でも日本ほど「幽霊」「妖怪」などの研究が進んでいる国はないと思われる。日本語の「幽霊」という言葉は、「死んだ〈もの〉の霊魂の異常な状態を意味する。〈幽霊〉と言った場合の〈霊〉は通常は〈人間〉の霊で、その霊が本来は〈あの世〉に行くべきなのに、〈この世〉にさまよい出てきた状態が〈幽霊〉と呼ばれてきた。国語辞典の類にも、〈死者が成仏できずに、この世にさまよい出てきた姿。亡魂、亡霊、亡者〉などと説明されている」という小松和彦の指摘は、インド人の幽霊に対する考え方とほぼ似ている[1]。インド人の脳裏にある幽霊のイメージは、「幽霊は死者を離れた、得体の知れない霊魂で、生存者の前に出没するものだ」「幽霊は死んだ人の霊魂で、我々人間に見えない世界を漂流し、しばしば人間の前に出現するものだ」「幽霊は死んだ人の実体のない魂で、朧(おぼろ)で輪郭のはっきりしない、消えやすい姿かたちを有するものだ」「幽霊はこの世との触れ合いを続けている死者から離れた実体のない霊魂のようで、その存在を裏づけてくれる科学的証拠はない」、などである[2]。

では、なぜ死んだ人の霊魂が「幽霊」として漂うようになるのかというと、日本人もインド人もその理由をほぼ同じように考えている。人が死ぬと霊魂は今までその仮の宿であった体を捨てて、あの世へ行くか、自分のカルマ（業）に応じて何ものかに生まれ変わってこの世へ戻ってくるのが普通である。霊魂のあの世への旅を円滑にするために、この世に残っている家族や親戚がさまざまな葬送儀礼を行ったり、漂っている魂を送り出す儀式や祈祷を定期的に捧げたりする。例えば、ヒンドゥー教の場合、地方によって多少異なるが、死後4日目か13日目、あるいは16日目にこれらの儀式を行う。キリスト教・イスラム教・仏教・ジャイナ教などにも似たような儀式がある。周知のとおり日本にも、告別式や、定期的に行なわれる儀式が必ずある。にもかかわらず、この世への深い執着のために、または自分を非業の死に追い込んだ人に対する怨念のために、もしくは子どもや家族に対する飽くことの知らぬ愛情・愛着のために、この世に残りたいという願望が強く、あの世へ行くことを拒絶する場合がある。こういう霊魂は「幽霊」として、または「ブート」として出現するのだ、と日本人もインド人も信じている。

幽霊の持つ特性

幽霊の特性について、日本ではすでにさまざまな説が知られている。柳田國男は「妖怪」と「幽霊」を区別して、妖怪が特定の場所に現れるのに対して、幽霊は定められたときに、特定の相手を狙って出現するが、出現する場所は決まっていない

1 小松和彦「幽霊 解説」『怪異の民俗学6 幽霊』河出書房新社、2001年。
2 インド人の民俗学者、日本研究科の同僚、日本語学習者などを対象とした口頭アンケートへの回答。

と論じた。ちなみに、出現するのは丑満つ時、すなわち夜中である[3]。一方、小松和彦は柳田の説を否定し、幽霊は生前に何の関わりもなかった人の前にも出現することがよくあると説く。「幽霊」は死者の生前の姿で出現するのが基本条件の一つで、いつ、どこでも、誰のもとに出現してもおかしくない、と彼は論じている[4]。また、諏訪春雄は、人の属性をそなえて出現するものを「幽霊」と呼び、人以外のものの「幽霊」および人以外のものの形で出現するものを、「妖怪」と呼ぶ[5]。

周知のとおり、日本では、「幽霊」を「化け物・妖怪」の一種として見る人もいれば、別々に考える研究者もいる。例えば、小松和彦は、「これまで宿っていた魂の容器であった肉体が腐敗したり、もはや存在しないがために、霊魂がさまようことになる。完全な死者にもなれず、また完全な生者にも戻れないで、さまよう霊魂が、〈幽霊〉の原質部分なのである」と、幽霊を妖怪の一種と見なし、さらに、「個人史が失われ、個性が、名前が、さらにはその姿かたちが失われていくにしたがって、〈幽霊〉は〈幽霊〉としての性格を失っていく」と述べている[6]。すなわち、生前の姿かたちで出現するものが「幽霊」なのである。

他方、インド人の感覚では、日本でいう「化け物」「悪魔」「妖怪」「幽霊」すべてが「幽霊」、すなわち、「ブート」または「プレータ」である。これら幽霊はさまざまな姿かたちで現れるが、ブートが、生前の属性をそなえて出現する「幽霊」、または姿かたちが曖昧な「幽霊」であるのに対して、プレータは非業の死を遂げたときの死体の姿、もしくは棺桶に入っていたときの死装束のまま出現するものを指す。死装束の形で現れる場合は、西洋的・キリスト教的なものが多い。ブートは人間の姿かたちで現れるのが普通だが、動物に化けて現れることもたまにある。日本では、狐が、化ける動物の代表格であるのに対し、インドでは蛇や猫などに化けて出現することが多い。また、現れる場所、時間そして対象に関しても、日本と似ている点と異なる点がある。

インド人が持つ幽霊のイメージ

死者の生前の姿で出現することが「幽霊」の基本条件の一つと指摘されているが、全くそのとおりだと思う。前述のヴェタールは人間のような体を持ってはいるが、耳が異常に大きくて、髪の毛は真っ白である。木の枝に逆さにぶら下がっている姿を見ると一種の怪しさは感じるものの、怖いという気にはどうしてもならない。つまり、「ブート」と聞いてインド人の脳裏に浮かぶ「幽霊」のイメージは、このヴェタールではなく、真っ白な服装をし、長い髪を垂らし、魅力あふれる目つきでこ

[3] 詳細は、『柳田國男全集 20』（筑摩書房、1999 年）所収の「妖怪談義」を参照。
[4] 小松和彦「幽霊　解説」『怪異の民俗学 6　幽霊』河出書房新社、2001 年。
[5] 諏訪春雄「幽霊とは何か」『怪異の民俗学 6　幽霊』河出書房新社、2001 年。
[6] 小松和彦「幽霊　解説」『怪異の民俗学 6　幽霊』河出書房新社、2001 年。

ちらを見ている、まるで生者のような美人の姿である。その美人は、ときどき正体を現わす。そして、そのとき初めて彼女が人間ではなく幽霊であることに気づかされる。どういう理由かは分からないが、インドの各地方に伝わる幽霊のほとんどは「女の幽霊」である。幽霊は影法師を持たないし、瞬きもしない。中には鼻声で話をするものや、足が逆方向に曲がっているものもいる。同じ姿で同時に多数の場所に出現することができ、瞬く間に居場所を変える能力も、動物などに化ける力も持っている。一見歩いているようだが、実は地面の上を流れ、浮いている。インド人の考えによると土は聖なるもので、幽霊はこの聖なる土を怖がるという。それゆえ、幽霊の出る恐れのある場所を通るとき、身体に土を塗りつける慣習を持つ地方もある。また、金属製の道具（特に鉄）や聖典などを持っている人にも幽霊は近づかないと信じられている。

日本の幽霊も、昔は生前のかたちで出現するのが普通だったが、時代を経るにしたがって幽霊の姿かたちも移り変わり、今日の日本の幽霊の多くは両足がない姿で現れるようだ。日本の典型的な幽霊像の一つである「雪女」の絵を見ると、乱れている長い髪や白い服装などはインドのエクシに極めて似ている。ところが、雪女には足がなさそうだ。着物姿で出現するので、足がないことにすぐには気づかない[7]。

もう一つ、幽霊話に関連してインド人の頭に浮かぶのは、幽霊の居場所、すなわち住まいのことである。インド人の考えでは、ふだん幽霊は高い樹木の上に住んでいる。例えば、ケーララ州のエクシの住まいはサトウヤシの上で、先に触れたヴェタールも火葬場のそばに立つ木の枝にぶら下がっている。もちろん、家や屋敷に住む怨霊（幽霊）もいる。幽霊屋敷の話は、ホラー映画やホラーストーリーなどに頻繁に登場する。

図3　サトウヤシ
出典：<Google>
kalichepp.blogspot.com

インドの有名な幽霊

インド全国に伝わるヴェタール以外にも、各地方それぞれに特徴のある幽霊がたくさんいる。中でも、ケーララ州、ベンガル州などの海と山に挟まれている地方や盆地には、他の地方より幽霊譚の種類が多い。さらに、民族性も関係しているような気がする。例えば、インドの人口の80パーセントはヒンドゥー教徒であるが、北部と南部それぞれで民族が違うので、文化も言葉も、民間伝承・民族宗教なども

[7] インドの幽霊の中にも、足のないものがいる。例えば、ケーララ地方では、川や海の水面を猛烈なスピードで移動するエクシは、一見足を持っているようだが、実は持っていないと信じられている。

異なっている。また、南インドと東北インドにはアニミズムやシャーマニズム的要素が多く見られ、「幽霊」の種類も、幽霊の存在を信じている人も数多い。

以下、インド各地方の代表的な幽霊について、簡単に説明してみたいと思う。

チュライル（Churail）

まず、北インドでよく知られている幽霊には「チュライル」（Churail）という女の幽霊がいる。妊娠中または出産中に何らかの理由で死亡してしまった女性の幽霊で、生前の女の姿で出現する。足が逆方向であることや、体の他の部分が逆さになっていることなどが、この幽霊の特徴である。瞬く間に姿を変える能力を持つチュライルの好物は、若い男性である。道端、交差点、野原など、若い男をそそのかしやすいところに出現する。チュライルに魅了され、結婚して通常の家庭生活を送る男までいるといわれるが、結局その男はいつか殺されることになると信じられている。

図 4　チュライル
出典：mississippi-spi.blogspot.com

東インドのベンガル地方は幽霊の種類が豊富で、有名なものとしてはプレタニ（Pretani）、ペンチャペチ（Penchapechi）、メッチョ・ブート（Mechho Bhoot）などがいる。

図 5　プレタニ
出典：<Google> www.ovguide.com

プレタニ（Pretani）

結婚する願望を持っていたのにそれを実現する前に死んでしまうなど、希望や欲望がかなわぬまま突然に非業の死を遂げる女性の幽霊がプレタニである。ベンガル語では、プレタが男の幽霊で、プレタニが女性である。プレタニの特徴は、チュライルと同様に足が逆方向についていることと、男性の姿にも化けることができる点にある。時と場所によって、極めて恐ろしいものに化ける能力を持っているプレタニは、被害者に襲いかかるまでは完全な人間の属性を持って現れる。

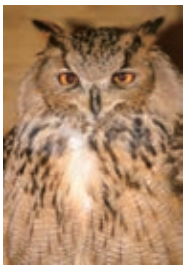

図 6　ペンチャペチ
出典：<Google>
maskofreason.wordpress.com

ペンチャペチ（Penchapechi）

ペンチャペチは珍しい幽霊の一つで、ベンガル

地方の森の中を漂う梟（ふくろう）の姿を持つ。森林の奥を通る旅人の後を追い、たった一人になったときに襲いかかって、その肉と血を貪るという非常に恐ろしい振る舞いをする幽霊である。

メッチョ・ブート（Mechho Bhoot）

これは魚を食う幽霊で、普段は魚がたくさんいる農村の池や湖のほとりに住んでいる。農家の台所や漁師の船においてある魚すら、この幽霊に盗まれることがあるといわれる。

南インド・ケーララ地方の幽霊

南インドのケーララ地方にも幽霊の伝説が多いが、中でも「エクシ」、「クッティ・チャータン」（Kutti Chaattan)、「マルダ」（Marutha）、「マータン」（Matan）などがよく知られている。中でも「エクシ」は種類が多く、そのほとんどが怨霊と信じられている。ケーララ地方の幽霊の一つの特徴は、幽霊の神格化である。古代から伝承されてきた幽霊・怨霊はいずれも寺に祀られ、神様のように崇拝されている。エクシはケーララ地方では誰もが知る幽霊である[8]。

「クッティ・チャータン」は、日本の座敷童のように、人に富を持たせたり、金持ちを貧乏にしたりといったいたずらをする幽霊で、人を殺したり、怨念を晴らすなどということはしない。それゆえに、この幽霊を神様として崇拝する人も多い。「マルダ」と「マータン」は、重い病気や伝染病などをもたらす怨霊と見なされているが、これらを神格化し、崇拝することによって、伝染病などの激発や流行を防ごうとしたのである。

ここで、ケーララ地方を代表する幽霊エクシについて詳しく解説しよう。

図7　ヴァダ（Vada）エクシ
出典：jpeg-tysonthej.blogspot.com

エクシ（Yakshi）

エクシは非業の死を遂げた女性の幽霊で、自分の人生を壊したものへの怨念を持って、ほとんどが生前の姿かたちで出現する。怨念の対象である者を殺し、その血肉を飲食するまでは何らかの方法でこの世に残ることを誓って現れる。目的を達

[8] ケーララ地方は古くから幽霊譚が多いところで、ここで取り上げたものは大海の一滴にすぎない。例えば、エクシやマルタといった幽霊の種類は、数えきれないほど多い。特に、エクシは、古代のものだけではなく、近現代のものも結構いる。それに、象など動物の幽霊もいると信じられている。
（添付の絵や写真は、http://upload.wikimedia.org/wikipedia 及び http://www.google.co.in/search から引用したものである）

するためには遠慮なくどのように残酷な手段もとる。あるときは若く美しい女性の姿、またあるときは痩せこけた老婆の姿で現れる。たまに猫など動物の姿で現れることもある。

インド人の考えによると、人間の魂とは滅びることができないもので、人が死ぬとその魂は別のものに生まれ変わる。非業の死を遂げた人の魂は、いつか人間の子どもとして生まれ変わるか、あるいは、怨霊となって現世に残り、恨みを晴らす。その怨霊は、自分を殺害した人間の親戚である若い女の体に取り憑き、恨みを晴らす機会を待ち暮らすのである。ごく普通の女性の姿で現れ、自分のことを少しも疑わない男を恋の虜にして結婚までした挙句、相手を殺害してしまうという話も伝えられている。

このエクシという幽霊を鎮圧・征服することはなかなか難しい。魔法使いや陰陽師の手を借りて服従させてから、どこかの寺に女神として祀ることにより、いったんこの世を離れるようにさせるのである。一般に幽霊を鎮圧するにはいろいろな方法があるが、エクシの場合は、陰陽師が宗教的な儀式やマントラ（Mantra）を施して、女性の体に憑いている怨霊を払い、あの世へ見送ってやる。万が一、どうしても出て行かずにこの世に残りたいと執念深く襲いかかるときには、頭の真ん中に鉄の釘を差し込むと女性に憑いている怨霊の力は失せ、ごく普通の人間として生き続ける。ところが、もし誰かが間違ってその釘を外してしまうと、以前より大きな破壊力を持って再びエクシとしての振る舞いを開始する。ちなみに、もう一つ別に、女性からエクシの怨霊を呼び出し、それをパーラ（Paala）という木に釘で打ちつけるという方法も伝わっている。

図８　パーラ
出典：<Google>
ahaplessoul.blogspot.com

有名なエクシとしては、カリヤンガーット・ニーリ（Kalliyangattu Neeli）、マンガラトゥ・チルテーヴィ（Mangalathu Chiruthevi）などがいる。最後に、民間伝承の中で「エクシ」という幽霊がどのように生まれたのかについて、カリヤンガーット・ニーリの話を例に簡単に述べたい。

カリヤンガーット・ニーリ（Kalliyangattu Neeli）の話

昔、ケーララ州のティルヴァナンタプラム（Thiruvananthapuram）という地域南部に、パシャカナルール（Pazhakanallur）という村があった。そこには、アッリー（Alli）という名の美人が住んでいた。ある日、アッリーは、女友だちと一緒に寺参りをした際、ハンサムな僧侶を見て一目惚れをしてしまう。その僧侶ナンピ（カー

スト名）が実は性質の悪い人間だということには気づかなかった。彼は肉食をし、酒を飲み、よく売春婦のところにも通っていた。そんな彼と彼女は付き合い始め、数か月後には彼と結婚したいという気持ちを母親に伝える。母親は最初反対するが、結局、彼との結婚を許す。結婚後、僧侶は次第にその正体を見せ始める。アッリーの家からたくさんの金品を奪い取るだけでなく、彼女らに対する態度も酷いものだった。彼が悪人であることはアッリーの母親にもはっきりと分かった。ある日、母親と鬼のような僧侶との間でけんかが始まり、僧侶は持っていたナイフで母親を刺し殺そうとする。そこで、彼女を警護していた男たちが僧侶を殴りつけると、怪我をした彼は家から飛び出して森林の方へ駆けて行った。そのことを知ったアッリーは、夫のところへ行って一緒に暮らしたい、と母親に告げる。彼女は夫の足跡を辿って行き、彼が一本の木のそばに立っているのを見つける。一緒に暮らしたいという思いを伝えると、くたびれ果てていた彼女はすぐ彼のひざの上で横になって寝てしまった。ところが、悪人の僧侶はアッリーの装飾品を盗む決意をし、近くにあった巨大な石で彼女の頭を打ちつぶしてしまう。死の間際に、アッリーは、すぐ隣にあったサボテンを見て、「ああ、サボテンよ、あなたこそ、この事件の目撃者だ」と叫んで、息をひきとった。一方、彼女を殺した僧侶は、井戸の水を飲みに行ってコブラにかまれ、気を失った挙句に死ぬ。そして、後からやってきたアッリーの弟もまた、姉の死体を見て悲嘆に暮れ、結局、僧侶が姉を打ち殺すために使った同じ石で自分の頭を打ちくだいて自殺する。

この事件から数年後、カヴェーリプーム市（Kaveripoom）の王妃が妊娠した。占い師は、妃の胎内には双子がいると王に告げ、同時に、その胎児には悪魔の性質がみられると予言する。まもなく、王家には双子の娘と息子が生まれた。王は娘をニーリ（Neeli）と名付け、息子にはニーラム（Neelam）という名前を付けた。子どもたちは見る見る大きくなり、ある夜、双子の姉弟は、国を全滅させることをもくろみ、魔力を利用して宮殿の外へ出ると、近所の農民の家畜を大量に殺してしまう。農民たちから訴えられた王は、事の真偽を確認するために密偵を遣わし、ニーリとニーラムが家畜を殺している現場を目撃した密偵はそのことを王に報告する。王が占い師（陰陽師）にその理由を尋ねたところ、悪魔の双子は昔亡くなった二人の怨霊の生まれ変わりである、という。双子を殺すしかないと陰陽師は王に勧めるが、妃が泣きながら、子どもを殺すことは絶対に許さないと言い張るため、双子をパンチャヴァン（Panchavan）という森に捨てることにした。

パンチャヴァンはパシャカナルール村の近くにあったので、双子の鬼子による迫害を以前より多く受けるようになる。ニーリとニーラムは村にいた数えきれないほどの家畜を殺して、その肉を食べた。そこで、被害を受けた70人の村民は、悪魔の双子を退治しようと、魔法使いを呼び寄せるが、結局、ニーラムの征服には成功したものの、ニーリを服従させることはできなかった。逆に、自分を征服しようとする魔法使いと、彼を呼び寄せた70人の家畜の持ち主を殺してやろう、とニーリ

は決心する。ある日のこと、カリヤンガード（Kallyangadu）の近くまでやってきた魔法使いを見つけたニーリは、にわかに美人に化身して彼の前に現れ、自分の居所であるサトウヤシまで誘い出して、彼を殺害してしまう。

ところで、その昔、アッリーという女性を殺害した僧侶は、アナンダン（Anandan）という男に生まれ変わっていた。ある日、旅の途中にアナンダンがカリヤンガードに辿り着いたのを見つけたニーリは、彼を殺してやろうと近づくが，持っていた魔法の杖のおかげでアナンダンは命拾いする。ニーリは、あきらめずに次の機会を待ち続けている間にも、数えきれないほどの美男子を誘惑し、殺してその血肉を貪った。ニーリの迫害から逃れるために、彼女を征服してどこかの寺に祀るしかないと、多くの魔法使いや陰陽師が現れるが、皆ことごとく失敗してしまう。最後に、カダマッタトゥ・カッタナール（Kadmattathu Kathanar）という、当時全国に名を知られていた魔法使いのカトリック神父が彼女を征服することに成功し、近くの寺に祀った。それ以後、ニーリというエクシが出現したことはないといわれている。